令和三年度

岡山白陵中学校入学試験問題

国語

受験番号	

注意

一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
三、開始の合図があったら、まず問題が一ページから二一ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

一

次の各問いに答えなさい。

問1　次の①～⑩にある――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 電子マネーでセイサンするメリットについて考える。

② 線状コウスイタイにより、経験したことのない激しい雨に見まわれた。

③ 『平家物語』は、平氏のコウボウを描(えが)いている。

④ せっかくの海外旅行の計画が、ダイナシになった。

⑤ 一般に、お金を払って入浴する施設(しせつ)をセントウという。

⑥ 学校生活最後の大会で入賞し、ユウシュウの美をかざることが出来た。

⑦ 住宅購入(こうにゅう)について、マンションにするかイッコ建てにするかで悩(なや)む。

⑧ 昨年はお盆(ぼん)にキセイするのをあきらめる人も多かった。

⑨ 激しい運動によって、半月板をソンショウしてしまった。

⑩ 今後のテレワークでの働き方をケントウする必要がある。

問2　次のⓐ～ⓓの文章を読んで、そこから読み取れることとして正しいものを後のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ⓐ　重油流出事故のあったモーリシャスの国旗は、アフリカの多くの国々の国旗とは少し異なる。アフリカで最初に独立したエチオピアにならった、赤、黄、緑ではなく、それにインド洋の青を加えたデザインである。

ア　モーリシャスの国旗は、緑、赤、黄の三色旗である。
イ　アフリカ諸国の国旗は、青、黄、赤の三色旗が多い。
ウ　モーリシャスの国旗は、赤、青、緑、黄の四色旗である。
エ　アフリカ諸国の国旗は、黄、緑、青、赤の四色旗が多い。

ⓑ　「コオロギ」という語は、古くは秋に鳴く虫をひとまとめにして指す言葉であり、今で言うコオロギを指す語は「蟋蟀（きりぎりす）（キリギリス）」であった。また、「機織（はたおり）（ハタオリ）」は、古くはキリギリスを指した。

ア　古くはキリギリスがコオロギと呼ばれ、ハタオリがキリギリスと呼ばれた。
イ　古くはコオロギがキリギリスと呼ばれ、キリギリスがハタオリと呼ばれた。
ウ　古くはコオロギとキリギリスが同一視され、それらとハタオリは区別された。
エ　古くはコオロギもキリギリスもハタオリも、単にコオロギとだけ呼ばれた。

ⓒ イスラエルとパレスチナが、共にエルサレムを首都と宣言し、対立しているのは宗教の違いを背景とするが、一方でイスラエルと、エジプト・ヨルダンの両国は、それを乗り越え正式に国交を結んだ。

ア　エルサレムとエジプトは対立している。
イ　エジプトとヨルダンは宗教が異なる。
ウ　パレスチナとヨルダンは対立している。
エ　イスラエルとエジプトは宗教が異なる。

ⓓ タピオカの原料はキャッサバからとれるデンプンであり、小麦が原料のデュラムセモリナもデンプンの仲間であるが、水を混ぜるとグルテンになるものとならないものがあり、前者はグルテンにはならない。

ア　タピオカの原料はグルテンにならないデンプンである。
イ　デュラムセモリナはキャッサバの仲間である。
ウ　小麦からとれるデンプンはグルテンにならない。
エ　どのデンプンも水を混ぜることでグルテンになる。

問3　次の(1)～(3)にあるア～エの漢字で、太く示しているところの筆順が何画目にあたるかについて考え、他と一つだけ異なるものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1)　ア　区　　イ　式　　ウ　好　　エ　田

(2)　ア　初　　イ　成　　ウ　何　　エ　若

(3)　ア　阪　　イ　門　　ウ　方　　エ　回

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文上部の番号は、行番号です。

「僕」は、「かわいそうだ」と思ったことを書き留めた、「かわいそうなことリスト」というノートを作っている。何がどうかわいそうなのかを、そのノートに詳しく書くことでそれらを救ってあげられると考えているからである。大きいという言葉で片付けられてしまう「シロナガスクジラ」、近い種族がおらず図鑑の説明もほとんどない「ツチブタ」、名前すら紹介されない「映画キャストの女性」などが「かわいそうなことリスト」に挙げられている。

新聞を広げればいくらでも残酷な事件や信じられない事故は載っているが、僕は決して世界中のすべてのかわいそうなことを一人で引き受けようとしているのではない。世界には僕以外の担当者もいて、各々が自分に任せられた範囲で全力を尽くしているのだと承知している。それぞれノートによって、小部屋のインテリア(注)にも違いがある。だからそのかわいそうなことにとって、最も居心地のいいソファーを勧めてあげなくてはならない。

豚の脂身をどうやって処分しようか考えあぐねている給食の時間、あるいは底に足をつけたまま、泳いでいる振りをするため悪戦苦闘しているプールの時間、時折、他の担当者について考える。皆がんばっているかなあ、と思う。一生懸命かわいそうなことを見つけ出し、a せっせとノートに記録している様子を想像する。そうしながら脂身を飲み込み、目をつぶって水を掻く。

僕が一番心配なのは、自分の担当のかわいそうなことを見落としてしまう事態だ。彼らは皆図々しさとは無縁だから、自ら無遠慮に押しかけてきたりはしない。僕がうっかりしていると、彼らはいつまでも安住の地を見つけられず、この世をさまよい続けなければならない。今こうしている間にも、僕を待っている誰かがいるかと思うと、居ても立ってもいられない気持になる。

いかなる時も僕は油断せず、神経を張り詰めている。誰が僕に割り振ったのかは不明だけれど、とにかく自分の担

当を全うすることに全力を尽くしている。

唾液腺の実験のため、頬に穴を開けられたパブロフ博士の犬。ギネス記録挑戦大会で、バスタブ二十六杯分のホットココアを製作中、巨大鍋に落下して大火傷を負った村長。牧場から脱走し、二年後、全身伸び放題の毛に覆われた姿で発見され、新種の珍獣に問違われた羊。

僕に割り振られている担当は本の中なのだろうか。かわいそうなことに出会うのは、図書室で本を読んでいる時が多い。しかし、(注2)ライトの彼は違う。あの子には実際に会ったこともあるし、顔も名前も知っている。そういう人がリストに入るのは、①とても珍しい。

彼はお兄ちゃんと同じ野球チームのメンバーだ。僕にそんなことを言う資格がないのはよく分かっているが、下級生を合わせても、チームの中で一番運動神経が鈍い。バットと同じくらい痩せている彼は、打席に立てば、ふらふらせずにヘルメットを被っているだけで精一杯という有様だったし、グローブをはめるとたちまち拷問器具に拘束されたかのように動きがぎくしゃくして、とてもボールをキャッチするどころではなくなった。足は遅く、声は小さく、ルールだってきちんと覚えているかどうか怪しかった。

我が家では、試合のある日は必ず家族で応援に行くのが決まりだった。お兄ちゃんはたいてい二塁を守り、三番か五番を打っていた。エースで四番の子とともにチームの中心を担い、監督や仲間や保護者たちからも信頼されていた。

「あいつはセンスがいい」

パパはよくそう言ってお兄ちゃんを褒めた。体力や技術は練習でいくらでも向上させられるが、センスは選ばれた者だけが手にできる特権らしかった。

パパとママはバックネット裏にある保護者席の最前列に陣取る。どんなに試合が長引いても大丈夫なように、いつもたっぷりの軽食と柔らかいクッションを用意している。パパはビデオを撮り、ママは手作りの旗を振る。

②僕は二人とは離れ、外野とつながった斜面の木陰に一人座る。家族一緒に試合を応援するのは決まりかもしれないけれど、同じ場所に座る約束はしていない、野球場はこんなに広いんだから、と自分で自分に言い訳している。

野球チームに入れる規定の学年になった時、学校の健康診断で腎臓の値に異常が発見され、A用心のために激しい運動は控えた方がいいでしょうと言われてB僕がどれほどほっとしたか、パパもママも知らない。それは病気の苦痛を打ち消して十分に余りある安堵だった。野球をさせられるくらいなら、スナック菓子を我慢したり、膀胱に管を差し込まれたりする方がずっとましだった。

Cパパは最初のうち、自分の息子が野球ができない、という事態を受け入れるのに戸惑っていた。野球を知らないままどうやって成長できるのか、見当がつかないといった様子だった。もしかすると、パパにとってはそのことの方が病気の心配よりも重大なのかもしれない。一瞬だけ僕はそういう疑いを持ち、すぐに自分で打ち消した。

ライトの彼には毎試合出会えるわけではない。彼が登場するのはさまざまな条件が整った場合に限られる。大量得点でリードしている、あるいは負けている試合、九回最後の守り、代打代走で選手を使い尽くし、残っているのは彼ただ一人、そのことに気づいたコーチが情け心から審判に告げる。

「ライトの守備交代」

その頃にはもう皆、大方決着のついた長々とした試合に疲れ、誰がライトを守るかなど気にもしていない。皆の頭にあるのはただ、早く試合を終わらせることだけだ。

誰にも見送られず、君はベンチからライトまで重い足取りで駆けてゆく。ずっとベンチに座りっぱなしだったせいで、体はぎくしゃくしている。あまり使われる機会のないグローブは妙にてかてかとし、革の嫌なにおいがして、いくら指を曲げたり伸ばしたりしても手に馴染まない。

君は僕の前で立ち止まり、センターやベンチの方向を見やっては、落ち着きなくスパイクの先で地面を突く。守備位置はこのあたりでいいのかどうか、自信が持てないでいるのが分かる。でもどこからもオッケイの合図は送られてこない。仕方なく君は「よおし」とか「おう」とか、何かそれらしい掛け声を上げる。僕だけがその声を耳にする。白すぎてだぶだぶしたユニフォームのせいで、君の体はいっそう細く見える。

君はただひたすら、ライトにボールが飛んでこないことだけを祈っている。その祈りは、早く試合が終わってほしいという皆の願いよりもずっと切実で清らかだ。君が恐れるのは、ライトフライを落球してあたふたする無様な自分

ではなく、試合時間を更に延ばして皆をうんざりさせてしまう自分なのだ。

チームのために果たせる唯一の役割は何か、君はよく心得ている。ライトにボールが飛んでこないよう祈ること。ピッチャーがボールを投げ、野手がアウトを取り、捕手がホームを守るのと同じように、君も必死で戦っている。

もしボールが外野を転々としたら、僕も一緒に追いかけるよ。君に負けず劣らず野球は下手だけど、多少の手助けにはなるだろう。どうせ審判からは遠く離れているんだ。少しくらいずるをしたってばれやしない。

いつだったか図書室の先生が風変わりな小説の話をしてくれたのを僕は思い出す。とある野球場のライトにだけ長雨が降って、右翼手に黴が生えるのだ。題名もストーリーも忘れてしまったのに、そのエピソードだけが記憶に残っている。君を見るとその選手を思い出す。君の心の中に降っている雨の音が聞こえてくる。もしライトにフライが上がったとしたら、もたついた足取りでボールを追い、左手をb<u>おずおずと</u>宙に差し上げる君の、乱れた息と一緒に黴の胞子が吐き出される。

試合はまだ続いている。ボールがバットに当たる音が響くたび、君はびくっとして後ずさりする。手を伸ばせばすぐ届きそうなところに、背番号がある。腎臓の検査の数字が少し違っていれば君だって、重すぎるヘルメットや言うことを聞かないグローブに難渋しながら、こんな野球場の片隅でびくびくしている必要などなかった。息もできないほど黴に肺を侵食されることもなかった。

君は③<u>僕の身代わりなのだろうか</u>。ずっと心に引っ掛かっていた言葉を、ようやく僕は口に出してみる。君は何も答えない。頭上をはるかに超えてゆくボールをなすすべもなく見送り、それでも気休めに見当はずれな方向へグローブを差し出し、失笑と野次を浴びながら、一人皆に背を向けてどこか遠くへ走り去る右翼手。それは君ではなく、僕でもよかったはずなのに、君は文句も言わず、僕の分まで重荷を背負って恐怖に耐えている。

（小川洋子『かわいそうなこと』より）

（注1）インテリア――ソファーやカーテンなどの、室内装飾品のこと。

（注2）ライト――本塁から見て右側を主な守備位置とする外野手、またはそのポジションのこと。右翼手ともいう。

問1　――線部a「せっせと」・b「おずおずと」とありますが、その意味として最も適当なものを次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a「せっせと」
ア　素早(すばや)く正確に
イ　一見まじめに
ウ　ていねいに心をこめて
エ　つぶさに分かるように
オ　たゆまず一途(いちず)に

b「おずおずと」
ア　少々控(ひか)えめな感じで
イ　かなりいい加減に
ウ　ためらい恐(おそ)れながら
エ　決してあきらめることなく
オ　しっかりと勢いをつけて

問2　1行目～14行目にある記述の説明として**適当でないもの**を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「担当者」（2行目）とは、世の中にあふれている「かわいそうなこと」を救ってやる立場にある存在であるが、これは「僕」の想像上の存在であって、実在するわけではない。

イ　「最も居心地のいいソファーを勧めてあげ」る（4行目）とは、「かわいそうなこと」にとって、最も的確な言葉で「かわいそうなことリスト」に書き留めてあげるということである。

ウ　「皆がんばっているかなあ」（6行目）とは、自分がつらい目にあっていることを、自分の「担当者」にしっかりと理解してもらいたいという「僕」のひそかな願いの表れである。

エ　「安住の地」（10行目）とは、「かわいそうなこと」をあらゆる人からうらやましがられるような存在へと変えることができる「かわいそうなことリスト」のことである。

オ　「自分の担当」（13・14行目）とは、「僕」が救うべき「かわいそうなこと」を指すが、「僕」は「自分の担当」以外のことは、他の「担当者」が救うものだと考えている。

問3　――線部①「とても珍しい」とありますが、「珍しい」と言えるのはなぜですか。それを説明した次の文を読んで、［X］・［Y］にあてはまることばをそれぞれ考えて入れ、説明を完成させなさい。

かわいそうなことは［　X　］ことがほとんどだが、「ライトの彼」は［　Y　］人だから。

問4　――線部②「僕は二人とは離れ、外野とつながった斜面の木陰に一人座る」とありますが、「僕」がこのようにするのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　野球が下手でも頑張っている「ライトの彼」を勇気づけ、実力以上に活躍させてあげたいから。
イ　兄の野球にあまりにも熱中している両親のそばにいると、気まずい思いがしてくるから。
ウ　日頃から運動を制限されており、長時間炎天下にいることに身体が耐えられないから。
エ　自分の野球嫌いを知っているのに、試合の応援に連れ出す両親がにくくて仕方ないから。
オ　精神的に自立しており、いつまでも両親と一緒に行動することが恥ずかしく感じられるから。

問5　――線部A「用心のために激しい運動は控えた方がいいでしょう」・B「僕がどれほどほっとしたか」・C「パパは最初のうち、自分の息子が野球ができない、という事態を受け入れるのに戸惑っていた」とありますが、B・Cは、Aについての「僕」と「パパ」の反応の違いを示しています。次の問い(1)・(2)について答えなさい。

(1)　Bについて、「僕」が「ほっとした」のはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

(2)　Cについて、「パパ」が「戸惑って」しまったのは、野球をそもそもどういうものとして捉えているからですか。十五字以内で説明しなさい。

問6　――線部③「僕の身代わり」とありますが、どういうことですか。それを説明した次の文を読んで、［　　］にあてはまることばを考えて入れ、説明を完成させなさい。

「僕」が野球チームに入らなかったせいで、［　　］ということ。

問7　本文の表現や内容に関する説明として**適当でないもの**を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「君はベンチからライトまで重い足取りで駆けてゆく」（49行目）とあるが、「僕」が「ライトの彼」のことを「君」と呼び始めることは、「僕」が「ライトの彼」に、野球をしていたかもしれない自分自身を重ねていることの表れである。

イ　「白すぎてだぶだぶしたユニフォーム」（55行目）という描写（びょうしゃ）は、「ライトの彼」が野球に対して適性がないにも関わらず無理に野球をやらされていることや、試合にもほとんど出ていないことをほのめかしている。

ウ　「とある野球場のライトにだけ長雨が降って、右翼手に黴が生える」（63・64行目）という小説のエピソードを、「僕」はただ単に「風変わり」だとしか感じていなかったが、今回「ライトの彼」を見て、それは悲惨（ひさん）なことのたとえなのではないかという考えに至った。

エ　「乱れた息と一緒に黴の胞子が吐き出される」（66・67行目）は、チームメイトにいつもひどい目に合わされている「ライトの彼」が、自分と同じ苦しみをチームメイトに与えて、少しでも抵抗（ていこう）したいと内心思っていることを表現している。

オ　「手を伸ばせばすぐ届きそうなところに、背番号がある」（68・69行目）の記述から、「僕」は「ライトの彼」を後方から見ていると推測できるが、「ライトの彼」と同じ方向を向いていることで、自分自身の姿を「ライトの彼」に重ねやすくなっている。

このページに問題はありません。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「雰囲気を楽しむ」ということは、世界中どこの人間でもしていることと思われるかもしれません。事実あるいは現象としてはそれでまちがいないのですが、ゲルノート・ベーメ（1937―）というドイツの現代哲学者によると、雰囲気を美の対象として楽しむということを意識的に、しかも徹底しておこなったのは東アジア人、とりわけ日本人なのだそうです。

西洋人も「雰囲気を楽しむ」ことをしないわけではありませんが、雰囲気を美的対象として意識することはありませんでした。西洋人が伝統的に意識的な美の対象としてきたのは、物体そのもの（たとえば花とか山）およびその属性（色、かたちなど）あるいは人間の心（喜び、悲しみなど）でした。西洋人にとって、雰囲気は物体そのものでも、その属性でもなく、物体のまわりに漠然と存在する副次的、2次的現象にすぎませんでした。ベーメによれば、19世紀までの西洋絵画は厳格な写実描写かあるいは信仰など人間の内面の表現でした。雰囲気的なものはたとえたまたま描写されていても美的鑑賞の中心ではなく、あくまでも付随的な「つけたし」にすぎませんでした。

こうした伝統に大きな衝撃を与えたのは、東アジアの美術でした。東アジア人、なかでもとくに日本人は、朝もや、夕暮れなど漠然とした雰囲気を美的鑑賞の中心に据え、それを楽しんでいました。

詩でも同じです。西洋の詩の焦点は、やはり物体およびその属性や人間の感情でした。これに対して、①芭蕉の俳句などは西洋人には驚きをもってむかえられました。

鐘消えて花の香は撞く夕哉　　芭蕉

この句には、消えゆく鐘の音とそれに合わせるかのように地面から立ちのぼるほのかな花の香り、などが詠われていました。しかし、鐘の音の美しさがたたえられているわけではありません。その音は消えつつあるのです。「花の香」

と言いますが、どういう花なのかわからないし、どういう香りなのかもよくわかりません。また芭蕉は、うれしいとか悲しいといった自分の感情を表現しているわけでもありません。ただ「これが夕暮れの風景というものだ」と言うことによって、「夕暮れ」という漠然とした雰囲気全体の美しさをたたえているのです。

陶芸でも、鑑賞のしかたに西洋と東洋（とくに日本）とでは大きなちがいがあります。②西洋人は、自分が設計したとおりに陶芸作品ができあがらないと、「失敗作」だとして廃棄してしまいます。しかし、日本人は歪みがあっても、灰をかぶったり、(注1)釉薬がたれて部分的に色がちがっていたりしても、「かえって趣がある」「渋みがある」「わび、さびを感じる」などと、ほとんどの西洋人には理解不能な評価をして楽しんできました。これもまた「雰囲気を楽しんでいる」のだと解釈できます。

（中略）

赤い色が暑さや暖かさと、青い色が寒さや冷たさと、それぞれ結びつけられることは、よく知られています。こうした色の連想を利用して、③室内装飾デザイナーは「暖かい雰囲気」や「冷たい雰囲気」を演出し、照明デザイナーは照明器具を使って「やわらかい雰囲気」や「なめらかな雰囲気」を演出します。

これらの例のように、本来ある特定の感覚器官（たとえば視覚）で認識されているはずの現象が、連想などによってほかの感覚器官（たとえば触覚）でも認識されるという現象を「共感覚（synesthetics）」と言います。

青い色のものを見て、自分にはこれが青とは思えない、と言っても通用しません。なぜなら、青いものが青いのは客観的事実だからです。しかし、青い色のものを見て、自分には冷たい感じがするとは思えない、と言うことは通用します。なぜなら、青い色に冷たい感じがするというのは、厳密な客観的事実ではなく、多くの人がそう感じるということにすぎず、そうは思わないという人がいても、その人がまちがっているとはいえないからです。

青いものを青いと認識することは客観的認識ですが、青いものを冷たいと認識することは、客観ではありませんが、そうかといって□人□色の純粋の主観でもなく、その中間の④「相互主観的」あるいは「間主観的」認識といえま

す。

ベーメは「人と人とのあいだの雰囲気」についても語っています。ある種の雰囲気の中で、その中にいる人は何かに「呪縛」され、「幻想のとりこ」となっていることがあります。そうした中でその雰囲気を持続させるためには、人はその「雰囲気に調子をあわさなければならない」と指摘しています。

しかし、こうした雰囲気の中にいる誰かが「身を引き離して理性的にふるまい」「雰囲気の妨害」をして「雰囲気に〝亀裂を入れること〟」も可能であると述べています。また「パーティーのほがらかな雰囲気も、また国家行事の厳粛な雰囲気も」、その中で誰かが(注2)ヒステリックに泣きわめいたり、笑いたてたりすることによって、一瞬にして崩壊するとも指摘しています。

雰囲気を本格的な美の対象とは考えなかったということは、⑤雰囲気を学問の対象としても考えてこなかったということに通じます。学問には多くの種類があるので、学問の対象にするということをかんたんにまとめることは難しいですが、わかりやすい例としては分析や説明の対象にする、あるいはそれを使って何か重要なことを説明するといったことです。因果関係の原因や結果として議論するということも含まれます。

日常生活において西洋人が雰囲気を知覚できないわけはないのですが、西洋人が伝統的に学問の対象としてきたものは、彼らが「実在する」と考えたものだけでした。西洋の伝統的考え方では、「実在する」ということは、物体として客観的に存在するか、あるいは人間の心として、つまり主観として存在するかのどちらかでした。「雰囲気」というような現象は感覚的に知覚、認識はできても、ほんとうに存在するのかどうか疑わしいもので、そのようなものは学問の対象にはならなかったのです。

ベーメはこのことを、つぎのような例を使って説明しています。真っ暗な部屋の中で、「ブーン」という蚊の羽音が聞こえる。そうした状況では西洋人でも「いやな雰囲気」を感じるのですが、西洋人にとって重要なのは蚊の行動がもたらす結果であって、蚊が飛びまわっている「いやな雰囲気」というのは副次的現象にすぎません。蚊が人を刺して人がかゆみを感じるという「実在するもの」(物理的客体や人間の心理や感覚)は学問の対象になりますが、そうした現象のまわりで発生する「いやな雰囲気」のような付随的・副次的な現象は、学問の対象にはなりえなかったの

です。

（伊藤陽一『生命デザイン学入門』第４章より）

（注１）釉薬――陶磁器の表面に塗ってつやをつけるもの。
（注２）ヒステリックに――異常に感情を高ぶらせて。

問１　〰〰線部「□人□色」の□に共通する漢字一字を入れなさい。

問2　――線部①「芭蕉の俳句などは西洋人には驚きをもってむかえられました」とありますが、次の問い(1)・(2)について答えなさい。

(1)　「芭蕉」の俳句を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　柿(かき)くへ(え)ば鐘が鳴るなり法隆寺(ほうりゅうじ)　　イ　古池や蛙(かわず)飛びこむ水の音

ウ　菜の花や月は東に日は西に　　エ　分け入っても分け入っても青い山

オ　雀(すずめ)の子そこのけそこのけ御馬(おうま)が通る

(2)　「鐘消えて」の俳句が、驚きをもってむかえられたのはなぜですか。それを説明した次の文を読んで、［　　］にあてはまることばを三十字以内で抜(ぬ)き出(だ)して入れ、説明を完成させなさい。

「鐘消えて」の俳句は、西洋人の美しさのとらえ方と異なり、［　　］から。

問3　――線部②「西洋人は、自分が設計したとおりに陶芸作品ができあがらないと、『失敗作』だとして廃棄してしまいます」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　西洋人は、作品を構成しているかたちや色といった成分がじゅうぶんに整っていなければ、満足しないから。
イ　西洋人は、日本人が感じる「わび」「さび」までも設計しようと試みるが、納得（なっとく）できる作品が作れないから。
ウ　西洋人は、どんなでき具合でも受け入れる日本人と違い、あいまいなことを許さない厳しさを持っているから。
エ　西洋人は、物体そのものやその属性が一つになって全体の雰囲気を作っていない場合、作品を認めたくないから。
オ　西洋人は、できあがった作品の中に作者の内面を写し出していないような作品を、評価したいと思わないから。

問4　――線部③「室内装飾デザイナーは『暖かい雰囲気』や『冷たい雰囲気』を演出し、照明デザイナーは照明器具を使って『やわらかい雰囲気』や『なめらかな雰囲気』を演出します」とありますが、「暖かい雰囲気」や「やわらかい雰囲気」のような表現ができるのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問5　――線部④「『相互主観的』あるいは『間主観的』認識」とありますが、どういうことですか。それを説明した次の文を読んで、［　　］にあてはまることばを本文から十字で抜き出して入れ、説明を完成させなさい。

［　　］認識のこと。

問6　――線部⑤「雰囲気を学問の対象としても考えてこなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　「雰囲気」を事物のまわりで発生する「つけたし」の副次的な現象と見なし、気高い学問の世界に取りこむことを多くの人が嫌がったから。

イ　「雰囲気」をほんとうに存在するものと考えてはいたが、それを物体として客観的にとらえるには技術的に難しかったから。

ウ　「雰囲気」を事実あるいは現象として認めてはいたものの、多くの種類がある学問の中でどのように分類するか決められなかったから。

エ　「雰囲気」を実在しないものと位置づけ、日常生活の中で意識的に対象とする必要はないという考えが西洋にはもともとあったから。

オ　「雰囲気」を感じることができてもその存在を説明することは難しく、細かく分析することが主流である学問の対象とはならなかったから。